
中華民国における社会と文化の変容

ロナルド・スレスキー

<ハーバード大学>

要 旨

本稿では、1912年から1949年までの、近代中国における中華民国期に起きた四つの主要な変容について議論する。帝政から議会制まで移行した政府の形態における変化、特に、白話文への移行の動きをともなった表現法と出版の分野における変化、纏足の終焉といった大衆文化における変化について考察する。また、軍閥政権下であってさえ、中国国内では新技術が拡大する動きがあった。軍閥による自らの権力を増大する方策としての近代化の支持についても検討する。

キーワード 中華民国、議会制、白話文、教科書、纏足、近代的服装、軍閥、近代化

序

中華民国の施政は1912年に始まり1949年に幕を閉じる。民国期は、その始まりと終わりとなる2つの重要な出来事、つまり1912年の中華民国樹立と1949年の中華人民共和国の成立という大陸における政権交代のために、中国近代史に不連続な状態をもたらした時期であるかのように思える。しかし民国期は、知的領域に激震が走った時期であり、多くの人々が貧困の中で虐げられた人生を送っていたのとは対照的に、いくつかの面で経済的近代化がおこなわれた時期であった。また同時に、特権的エリートの間では西洋から持ち込まれた最新の音楽や思想、流行が享受される一方で、深刻な政治不安が生まれ、地方では軍事的衝突が繰り返された時期でもあった。この時期の始まりとその終焉を対照してみることで、民国期それ自体において起こった数々の変容について考えることができる。民国期とは、多くの変容が起こった時期であった。

帝国原理の崩壊

最初の変容は、1911年末に起きた清帝国の崩壊であった。数世紀にわたる支配を通じて、中国は、高度に発達した豊かさの象徴である王朝体制に誇りを抱くようになっていた。皇帝は「天下」の象徴であった。皇帝は、秩序正しい季節の移り変わり、生命の成長と休眠の周期、人間と自然界との力の調和を象徴していた。皇帝が、政治と自然界の双方の中心に位置するという概念は、王朝体制の原則として、あらゆる社会階層の中国人に完全に受け入れられた。また、中国にいるすべての人間にとっての評価基準でもあった。最も見識の高い学者から日々畑を耕す農夫にいたるすべての人間が、「天高皇帝遠（天は高く皇帝は遠い）」という成句を知っており、この言葉はそれぞれの個人が享受していた政治的、経済的自由の程度を表す役割も有していた¹。

王朝体制が崩壊して間もない時期に、共和制政府の構想が、少なくとも紙の上では描かれていた。これは、この時期の歴史的名称を冠した代議制政府を組織することを目指すものであった。清朝の末期、まず地方議会が形成される。1916年は、「ストロングマン」と呼ばれる袁世凱（1859-1916）と袁の王朝体制を復興させようとする野望の両方が潰えた年であった。この年までに現れていた構想を基に、中国全土の省や地方都市の郷紳たちは、自らが地方議会の議員として選出されるべく選挙運動を展開した。各地方議会は100からそれを上回る議席で構成され（民国期の開始時、中国は22の省から成っていた）、その後その成員の中から北京の国会に送る代表を選出した。1918年には定数470議席であった国会は、一名の卓越した、広く支持される個人を民国の大総統として指名した。そして大総統は、後に自らの内閣を組織する首相を指名した。このようなボトムアップ型とトップダウン型を融合した過程は、すべてが富裕者、政治的コネを有する者、高度な公教育を受けた者といったエリートたちによって実行されていた²。

ただし、そのようにして組織された民国政府による成功を数えるよりも、直面した問題や1949年まで解決できなかった問題を挙げるの方が容易であることもまた事実である。民国の初期には、実質的な大総統の指名過程は、軍事力と暴力の脅威がその指名を可能にし、また無効にもするだけの力を有した軍人によって支配されていた。しかし、そのような時期においてでさえも、軍人ではなく文民を大総統にしようとする試みが繰り返された。民国期において注目し得る大総統は、徐世昌（1855-1939）と汪精衛（1883-1944）の2人である。2人は、傑出した文民が大総統に指名された例であったが、両者は共に、その時々々の軍事的ストロングマンの庇護を受けてもいた。1918年から24年に大総統の地位にあった徐世昌は、1886年に進士の称号を得る教育を受けた人物である。徐は思慮深く、穏健な性格であった。大総統の任にあったとき、反政府的民主化運動をおこなった学生に対し、徐より保守的な政治家が学生に対して過酷な弾圧を加えるよう主張した一方で、徐は寛大な処分を講じようとした。徐の行動の数々は民国の多くのメンバーの目に触れることとなり、徐自身はその能力が世論の形成に影響を与えることを期待した。しかし、徐を大総統の地位に据えた軍閥たちは、徐を大総統の座から追いやる際、世論を無視することを画策し、結果的に徐を無力な存在にした。徐は大総統の地位から強制的に追いやられたのち、自らの晩年を、学問と哲学、宗教に関する著作活動に捧げた³。

日本が中国国内に傀儡政権の樹立を開始した1937年の後になってでさえ、文民が共和国のトップに座するという理想をもち続ける人々がいた。傑出した国民党左派の指導者であった汪精衛は、1940年に日本によって樹立された南京国民政府における傀儡の大総統の任に着くことを受け入れた。汪は国民党の武断政治に完全に失望していた。汪はおそらく同様の感情を、日本軍に対しても、軍閥に対しても抱いていたことであろう。中国北部と中央部の主要都市を治める軍閥は、中国に文民統治をもたらそうとする中国人の手による政府を、無力なものにするだけの實力を有していた。汪は中国にいる限り、その背信行為を公然と非難した彼と敵対する国民党の指導者と愛国主義者、そして日本の支持を取り付けようとする汪の行為を拒絶する国民党と共産党から、命を狙われるという危険に晒されることになった。実際に当時、汪の命は頻繁に狙われた。日本が汪の身柄を保護することを望んだために、汪は可能な限り日本に滞在す

ることになった。そして1944年、汪は名古屋において肺炎のために死去する⁴。

上記のように、徐世昌と汪精衛を同一のカテゴリーに分類する中国人の歴史家は、おそらく存在しないことだろう。徐が結果は伴わなくとも、持てる能力の限りを尽くした中国北部出身の高潔な政治家とみなされるのに対して、汪は売国奴と非難されている。しかしながら両者は共に、民国期の国政レベルでの傑出した政治家であった。ただし、最終的には軍事力を擁する、より強力な存在によって政治生命を阻まれている。不幸なことに、ここで言及した2人を含む当時の文民のトップ指導者は、軍隊を効果的にコントロールする能力に欠けていた。それどころか、すべてのレベルにおける文民の政治指導者たちが、軍事力をもつ者たちによって操縦されるという現実があった。中国は、民国期が終焉する1949年までに、実効的に機能する代議制を基礎とした共和制政府を創り出すことができなかった。しかしそれにもかかわらず、地方部農村における民衆レベルの会合が自らの代表を選び出し、究極的には最高レベルの指導者たちに対して助言を与えることを実現するために彼らが尽力するという構想は、あらゆる社会階層の見聞の広い人々によって受け入れられていた。

表記法の変化

第二の変容は、読み書きと知的生活の領域で起きた。この領域における特筆すべき点として、口語的表記法の受容を挙げることができる。口語的表記法の使用は、民国期を通じて広まり続けた。この表記法は、数世紀にわたって開発された文言文（文章語）に取って代わることとなる。文章語においては、きわめて簡潔で、圧縮された散文体が、非常に微妙で、複雑な内容をもつ感情的、哲学的な思想内容を表現する場合でさえ使用されていた。「主語—動詞—目的語」という中国語の基本的な文法構造が文章語の基礎を成したが、時がたつにつれて、伝統的な散文体に定着した多くの単語や表現は、日常会話で使用される言葉とはかけ離れたものとなっていった。これは例えば、ごく基礎的な医療に関する文章や請求書などを書く場合であっても、文言文にする場合と、それを実際に言葉にして話す場合とでは、使用される一群のボキャブラリーが異なることを意味する。さらに、洗練された伝統的散文のおかげで、先立つ数世紀の間に研鑽され築き上げられてきた文章語のコーパス（言語資料）を参照して、引用と頭韻を自由に使いこなすことのできる環境が整えられていた。これは、洗練度が高く、説得力のある随筆であると認められるためには、随筆の中で提示する考え方に信頼性を与えるために、過去の様々な詩人や歴史的事件に言及する必要があることを意味した。きわめて豊穡で、大量に存在する歴史的な文章を吸収するのに何年もの時間を費やした者にしか、伝統的形式で、説得力があり、高い評価を受け得る随筆は書けないということでもあった。結果として、文語を使用したのは、大量の歴史的な文章に通じた、堅実で伝統的な知識を獲得していた人物に限られた。これはまた、ごく基本的な読み書き能力しか持たない多くの人々は、より高度な教育を受けた人々に手紙を書く場合に、彼らに対価を支払って手紙を書いてもらわなければならなかったことをも意味していた。医師の書いた処方箋、土地の権利書や財産の証書の内容を説明してもらうために、寺院で開かれた市が利用された。

文章語とは対照的に、口語体（白話文）では、日常会話で使われる言葉と構文にきわめて近いものを使用することが好まれた。民国初期には、高度な教育を受けた作家は、口語体を使っ

て執筆する場合でさえ、伝統的文章語や文章語にきわめて近い短いフレーズを文章中に挿入していた。またこれとは異なる意図ではあったが、新聞においても、日常会話に近い形での短いフレーズを使用することが好まれていた。しかしながら民国末期までには、話し言葉を完全に消化した書き方で出版された作品を目にすることができるようになっていた。それらは、物語や短編小説、宗教や政治的小冊子であることが多かった。

白話文の使用と同時に現れた最も重要な変化は、主張の論理性を向上させる手段として、文学や歴史的引用を使用することの減少であった。歴史的な文章から引用をおこなう場合には、読者に対して、その文脈と出典に関する何らかの説明がなされるようになった。新しい形式の書き方が確立したことで、ある程度の文字を書くことが出来る者とすべての若い学生たちは、文章の読解能力を容易に開発していくことが可能になった。

白話文の普及は、新聞や雑誌の出版数が増加することによって加速した。これらの2つのメディアは、欧州で19世紀に生まれたばかりのものであったが、誕生後間もなく、中国にも登場した。新聞と雑誌は共にイラストを自由に使い、持ち歩くのに便利な形式で印刷された。これら2つの出版形式の特色は、掲載される情報の内容にあった。新聞と雑誌は、新たに生まれた考え方や情報を掲載した号が即座に発行され、広く行き渡る媒体として認識されていた。読者たちは、手にする新聞や雑誌は最新の情報で満たされていることを期待した。2つのメディアが現在起こっている出来事と新しく生まれた考え方を強調したことで、過去に起こった出来事に対する読者の関心を、伝統的な考え方を学ぶ手段としてよりも、未来を考える際のガイドとしてみなすように仕向けた。彼らはまた、新しい考え方や革新、最新の科学的、技術的発見が予想され、評価されるような世界を目の当たりにすることになった。そして読者は、欧州や英国、米国や日本を席卷していたグローバルな傾向と同調する世界にさらされることとなった⁵。

その著作物や、明確に表明した考え方が民国期の中国の人々に影響を与えた人物のうち、ここでは3人の例についてのみ言及することにしよう。これら3人は、それぞれが白話文形式で叙述し、広く発行されていた新聞や雑誌に寄稿していた。そして各人が共に、より良き未来へとつながる価値観を模索する一方で、伝統に対しては批判的であった。魯迅(1881-1936)は、作品の舞台を清朝末期と民国初期に設定し、貧困の害悪と不合理な迷信を辛辣に風刺した小説家であり随筆家だった。魯は、ここで言及する3人の中では、一番早く生まれたことから最も早く死去する。しかし、他の2人の作品に比べ彼の作品は、力強く、長い期間を生き抜くことになった。これは魯の作品が、中華人民共和国の建国後、特に毛沢東によって直々に引き立てられたことによる。共産党から公的に支援されたことで、1950年代から80年代にかけ、魯の大衆性は強く維持されることになった。胡適(1891-1962)は、学者であり思想家でもあった。西洋から輸入したあらゆる新思想を中国人のために用いようとする若き中国人の改革家や思想家の活動に参加していた胡は、1920年代と30年代には、進歩主義的であったとみなされている。しかし、1940年代から50年代までには、胡は保守的な政治グループに属するようになっていた。作品の上でも表記法の面でも、胡の未来に向けた考え方と処方箋は、おそらく1930年代前半のある時点で固定されてしまったからである。そして駐米大使(1938-1940)、中華民国中央研究院院長(1958-1962)を歴任した胡は、保守的な国民党政権と強く同一視されるようになった。胡が執筆した文章においても、もはやその考えが広範囲に影響をもつことはな

く、壮年期に書かれたものに比べて進歩的であると考えられることはなかった。著作は時に学術的なものになり、死去する頃までには、大部分の若い中国人にとって時代遅れの存在であるとみなされるようになっていた⁶。

第三は、梅娘（1920年生）の例である。日本が1931年に中国東北部を占領し、翌32年に傀儡国家である満州国を建国したとき、梅娘はその地で中学生であった。38年までの2年間を日本で学んだ後に彼女は満州に戻り、日本占領下で発行された中国語の文芸雑誌のために働いた。彼女の小説では、男性社会で制約を受けた女性の受難が描かれた。彼女は、女性に男性の従属物であることを強制した伝統社会の保守的な価値観を激しく非難した。彼女は、同居していた恋人と結婚することを公然と拒絶して、彼女を知る人々に衝撃を与えた。梅とその恋人が住んだ部屋は、1930年代後半、新京（後に長春と改称）の若く野心的な知識人のためのサロンになった。満州国と占領下にあった北京の占領当局は、彼女の作品の出版を許可した。これはおそらく、男性の特権に踏みにじられ、虐げられる女性の姿を描いた彼女の作品が、満州国の中国人に対する日本の圧制的支配に対する批判としても読むことができることを、占領当局が見極めることができなかつたからであろう。日本の占領下になかつた、解放された地域においても、戦時生活の恐怖を超えて将来の新しい社会を心に描く若い人々に、彼女の小説は熱烈に歓迎され、読まれていた⁷。

戦争終結後、不幸な梅娘は中国共産党から数々の非難を受けた。ノーマン・スミスは、梅娘が1950年代前半に「敵性作家」に分類されたことを記録している。1955年には「日本の特務の疑い有り」という理由で起訴され、文化大革命の期間には「文学的漢奸」として非難された。彼女にとっての困難な時期は1980年代後半になってようやく終わりを告げた。彼女の作品は再び、中国において積極的な評価を受けることになる。実際的な白話文で書かれ、雑誌や小説を通じて発表された梅娘の作品は、民国期に巨大なものとなっていた保守的で社会的に様々な制限を加えようとする価値観に対して、辛辣な批判がおこなわれていたことの例証となっている⁸。

大衆文化の変容

第三の変容は大衆文化の面で起こった。1912年以降、数世紀にわたる強制のために、一度は広く受け入れられたいくつかの習慣が、きわめて急激に消え去った。それらの中には、男性の前頭部を剃り上げ、編んだ髪を後ろに長く垂らす、満洲族支配の下での弁髪という慣習があった。弁髪の慣習が270年にわたって続いた後、辛亥革命が勃発する。1911年という革命の揺籃期に弁髪を切るように求められた際、ほとんどの男性がこれに従おうとはしなかつた。弁髪を切ることは清朝の統治に対する背信を宣言するのに等しかったからであった。しかし1930年代までには、実質的にすべての中国の成人男性が、今日では一般的となった西洋風の自然で短い髪型にしていった。また、男性は徐々に人前での長袍（男子用の丈の長い中国服）の着用を止めていった。この習慣は1950年代にはすっかり消え去ってしまったようである。男たちはおそらく、高い襟のついた長袍を脱ぎ捨てることで、高い地位を断念していったのであろう。女性の場合は、一見したところ女性に対する明らかな権利侵害に見える纏足の習慣が、確かに中国北部の満州貴族や中国南部の客家共同体の女性のように決してこの習慣に従わない人々

も常に存在したものの、何の郷愁も残すことなく打ち捨てられた。過去の習慣である纏足の熱狂的愛好家は、古い習慣に染まりきった特権的エリートであることが多く、彼らは民国期に起きた様々な変容の中で社会の傍流に追いやられたこともあって、この習慣が終焉したことを公然と嘆き悲しむ者はごくわずかしかなかった⁹。

より広まったのは、結婚相手を選ぶ際には自らの意思を表明すべきであるという、若者の間で定着していくことになる姿勢であった。これについて重要なのは、五四運動（1919年5月4日に北京で起こった学生デモを記念する運動）の学生指導者によって進められたという点である。学生たちは総じて、自分たちの人生のすべてに影響を与えていた両親が持つ特権と、時代遅れで異論の余地の多い儒教的価値観に基づいたシステムのすべてを攻撃した。確かに当時は、両親が結婚相手を決定することに反対できないと感じる多くの若者が中国全土に存在した。しかし、直接愛し合う二人、つまり未婚の新郎新婦が自分たちの結婚に対して意見を述べることは許されるべきであるという考え方は、若者や両親たちの間でも広まっていった。民国期の末期には、結婚についてのこのような考え方は、最終決定の責務は両親が負うという条件の下で、人々の間で一般的に受け入れられるようになっていた¹⁰。

民国期が終焉を迎えたときの中国の大衆文化は、世界の多くの地域と同様に、1912年当時からは明確な変化を遂げていた。また、1949年時の中国における大衆文化が、伝統的な考え方や慣習と、1912年当時のすべての人々に衝撃を与えたであろう新たな価値観とを結び合わせた融合的なものであったという点も、世界の多くの地域と共通していた。中国内陸部の省の都市では、市場の店舗にバスに乗って多くの人々が乗りつけるようになっていたり、いとこの中に日本や米国で留学する者が現れてもそれを別段奇異なこととは思わなくなったというような変化が生まれたことを除けば、表面上は昔から変化しない習慣をより強固に維持していたようであった。大都市の富裕層と政治的エリートのライフスタイルは、海外からの輸入品によって最先端の国際的なものになっていた。彼らは人前で整然と洋服を着こなし、車であちこちに移動し、電話を自由に使うことができた。彼らは疑いなくフォックス・トロット（*訳者註：米国の社交ダンスのステップの一種）を知っていただろうし、ジン・マティーニを飲んだことであろう¹¹。

新しい技術の普及

第四の変容は、技術分野といわゆる近代化の面で現れた。人々の労働と生活、そして時間の過ごし方を一変させる多くの新技術が世界中で誕生した。これらの技術には、電気、電報、電話といったインフラ面での進歩から、ある限られた地域における上下水道の整備までのすべてが含まれる。また近代技術とは、鉄道、自動車、ラジオ、飛行機のことも意味している。それはまた、人々が、定められた時間に、機械が高速で稼働する喧騒と危険の中、近代的な工場で働かされることでもあった。そして、印刷技術から紡績機械にいたるまでの近代技術のほとんどが、西洋で人々がそれらを目の当たりにするようになってから 20、30 年以内、もしくはわずかに 2、3 年のうちに中国に到着した。

それらの技術が初めて中国に現れたとき、一般的な反応は複雑なものだった。特に農村地域においては、明らかに深い不信感が存在していた。地方の民兵が、その地域の風水の摂理を乱

していると主張して線路を引きはがすことがあった。また、その地域を飛び回る悪霊を刺激し激怒させたことで、地域住民に対して予期せぬ破壊行為がおこなわれることを防ぐために、農民たちが電信線を取り壊した例も知られている。ただし、20世紀に入ってから、この種の事件が発生することは稀になり、数の上でも減少することになった。その理由のひとつとして、その当時地方を統括していた者が、ためになる物であればなんでも利用する一方で、利益をもたらさない物であれば反対するという、抜け目のない実用主義的な人物であったことを挙げることができるだろう。これらの地方レベルで要となっていたのは、軍閥だった。

民国期、多くの軍閥は、地方で起きた小規模な衝突を自らの支配領域を拡大するために利用していた。そして他の軍閥から挑戦を受けるまで、自らの支配領域を統治した。民国の初期には、きわめて個性的な軍閥が多く登場した。彼らは金モールの肩章を身につけ、数々のメダルを纏って、訓練の度合いが均一ではない大軍に命令を下していた。その中の一人が張作霖（1873-1928）である。張は1916年から28年にかけて中国東北部を支配し、この地方の権益の大部分を握っていた。身長が低かった張は、部下と息子の張学良に対して分け隔てなく平等に接し、時には叱責や罰を加える激しく厳格な人物であった。張は、山賊から身を立てたイメージを培っていたが、実際には南満州の裕福な郷紳たちと親交をもち、この地方と産業に大規模な投資をおこなった人物でもあった。呉佩孚（1874-1939）も、個性的な軍閥のひとりだった。伝統的な公的教育を受けてきた呉は、秀才の資格を有していた。しかし呉については、その横柄な態度と激しい性格を証言する者もいた。中国北中部で数千の軍隊を率いていた呉は、自らが遭遇したあらゆる政府を動揺させることにきわめて熱心に取り組んだ。平和維持のために招かれたときでさえ、敵対勢力同士が争うように画策した。軍閥の中でも張作霖と呉佩孚は、自らの権力の座を保証する、彼らの指揮下にある軍隊の力に依存していた¹²。

民国期に、軍閥の中で最も成功を収めたのは蒋介石（1887-1975）だった。蔣が最も成功を収め、軍閥の中でも最も長期にわたって権力を保持したのは、武器による脅威や強制だけでなく、蔣が擁護した理念の力を通じて何百万人もの人々を動員することができたからであった。この理念とは、忠誠心と伝統的な保守主義の影響を受けた愛国心（nationalism）と愛郷心（patriotism）に基づいた価値観だった。蔣個人を国家の運命と同一視させることと、軍隊と警察機構を容赦なく使用することを通じて、蔣は1920年代に国家レベルの表舞台に上りつめた。そしてその死までその座に留まり続けた¹³。

地方で権力を獲得しこれを維持していく過程で、軍閥には自らのためになる可能性のある技術を受け止めるだけの器量があった。農民が線路や電信線に反対することを、軍閥は決して許容しなかった。そしてその地方の人々は鉄道や電報を使うようになり、軍隊や自分たちがその地方を移動する際には自動車を使用するようにもなった。最も有力な軍閥は、地方の主要都市と何百万もの人々が住む広大な地域を支配したが、彼らは皆、支配地域における近代化プロジェクトを支援した。軍閥は、物資を輸送するための道路を敷設するために公的資金を投入し、電報と電話回線を結び、西洋風の銀行と保険会社を設立した。そして、大都市において流行していた路面電車の敷設にも関わった。多くの軍閥がそれぞれの地方で近代化のために努力したが、そのほとんどに実験的農場が含まれていたようである。そこでは、新しい種類の植物と商品作物の育成が試みられていた。また軍閥は、西洋式の工場や鑄造場、鋌山にも迅速な投資を

おこなっていた¹⁴。

これらすべてのプロジェクトの目的は、まず軍閥のさらなる財政基盤を獲得することにあった。しかし即座に現れた現象は、風水上のバランスを乱すことであるとか悪霊の危険を理由にした農民の反対は認めないという断固とした姿勢だった。軍閥のプロジェクトは計画された通りに遂行された。このような意味において、軍閥は、地方レベルだけでなく、中国全土での急速な近代技術の普及に助力したといえるのである。

結語

民国期の中国は、様々な分野における変容を同時並行的に経験する近代国家になるために、フランス、ドイツ、米国、日本といった北半球の主要国家の一群に加わった。1949年以後の中国は、極度に排外的であった文化大革命期の10年間（1966-1976）を除けば、第二次大戦後の現代化の流れの中で活動的なプレイヤーであり続けた。1912年の民国期が始まった当初と比較すると明確に変化した習慣の中に、弁髪と纏足がある。1950年までには、前頭部を剃りあげた坊主頭におさげ髪をする男性は見られなくなり、女性に対して纏足を強要することもなくなった。当時の中国では、ほとんどの人々が西欧起源と考えられるシャツやズボンを着用した。ただし、中国でその習慣が広まった時にはすでに、世界中の多くの地域にも洋服を着る習慣は広がっていた。現在も依然としてこのような状態は継続している。電話、トラック、映画やガソリンエンジンといった機械装置は、現在では多かれ少なかれすべての人にとって身近な、当時の最新技術であった。白話文は出版物に広く用いられた。中でも最も重要なのは、学校の教科書に用いられたことである。男女が等しく尊敬を受けることは、必ずしも厳格にそうであったわけではなかったが、社会のあらゆる分野から認められた。中華人民共和国の建国以降、いわゆる軍閥や郷勇（郷紳に組織された軍隊）ほどの実力を誇る軍事的指導者は現れることはなかった¹⁵。

1950年以降に起きた現象の中で最も奇妙なのは、中国が再び皇帝を頂いたことである。皇帝とは、毛沢東（1893-1976）のことである。毛は、国内のあらゆる人間の生死を左右し得るほどの完全な力を獲得していた。毛の地位を高貴なものとし、その存在を国家が進む方向と結びつけるために毛が使用した象徴性は、清朝の皇帝たちが用いたものに比べると洗練の度合は低いものであった。しかし、赤い太陽、毛の発言の適確な引用、そして熱狂的な支持者たちの隊列といった象徴に満ちており、一切の批判は許されることはなかった。毛は極めて個人的な世界に暮らしていた。毛が望む食事はいかなる物であろうと手に入り、性的な機会も用意される環境を享受する一方で、身の回りの世話をする私的な使用人から国家レベルの大臣にいたる忠実な部下たちは、毛が声を発するたびにすくみ上がった¹⁶。

毛主席の死後、新たな皇帝の擁立が試みられたことは一切ない。予見し得る将来においても毛が最後の皇帝であるとする見方は、一般的に広く受け入れられている。王朝体制が終わった後に頂点まで登りつめた例外的な人物のことは、すでに過去の出来事になったと考えられてきた。むしろ中国という国家は、ボトムアップ型とトップダウン型の制度を融合した共和制政府の樹立を試みているとさえいえる。この政府には、代議制を採用し、民主主義を奉ずるという建前がある。今日では、地方政府のレベルで代議制度や民主主義が問題になった場合、最も僻

地に暮らす農民でさえ自らの意見を述べることを望むようになっていく。郷村レベルでの地方選挙は徐々に広がっており、農民にとっても必ずしも珍しくないものとして受け入れられている。首都の北京における全国人民代表大会は、依然として党中央の決定を追認するゴム印を押すだけの機関であるものの、この10年間でその度合いは減少している。議員は人民のより広い層からの代表として選出されており、人民の代表としての政府という考え方は、ある程度は広く認知されてきたように思える¹⁷。

纏足や弁髪といった習慣が消えていくにつれて、女性は家の内に匿われるべきであるという考え方も社会通念から消えていった。都市や農村に限らず、家の奥に女性を隠すという古い考え方を本気で信じている中国人はもはや存在せず、われわれが知る限りで、このような考え方を実践する人はまったくいなくなった。中国における女性の地位の変化は、1911年以降に起きた根本的変化のひとつである。中国の女性は、ヨーロッパ、米国や日本でそうであるように、男性と同様の権利や男性に対する影響力を得てはいないが、男性優位社会を維持するために女性に対する制約を正当化することは、今日ますます難しくなっている。女性に対する制約が支持されるような場合でも、女性の人間としての基本的尊厳はすぐさま認められるようになっていく。

中国全土に技術が普及したことは、何ら驚くことではない。むしろ、技術が生活を侵食する速度や、物事のやり方を無慈悲に変化させていく様が、すべての者を驚かせた。中国は、数々の新製品が市場で競い合う現象から利益を得ている。例えば、携帯電話が利用できるようになることで、中国全土の人々が電話で連絡を取り合えるようになった。今日では、中国国内のあらゆる村や場所で、誰もが常に携帯電話を持っているため、政府には電話線を引く必要がもはやなくなっている。今や私たちは、旧型電話を示したい場合には、現代的な携帯電話と区別するために「陸上通信線 (land line)」という言葉を用いるほどである¹⁸。

競い合う中で発展を遂げる中国に持ち込まれた新技術は、生活様式を変容させその質を高める一方で、機械装置のいびつな配置という結果も招いている。例えば中国では、ワールドワイドウェブにアクセスできるインターネットカフェを、多くの思いがけないような場所で目にすることができる。場合によっては、最貧困地域や極めて辺境の地域でネットに接続している状況が観察できる。しかし一方で、最大の都市においてでさえ、公衆衛生のための基本設備（上下水道やトイレなど）がきわめて簡素なレベルにとどまっており、いまだに外国からの観光客は煮沸したお湯でないと飲むではいけないと告げられている。北半球の様々な地域で観察することができるヘアスタイルや服装とほとんど同じものが、現在の中国でも見られるのとは異なり、インターネットや携帯電話のような新技術は決して健全に広がっているわけではない。新技術がもたらす変化は、消極的なものでも表面的なものでもない。これらが、われわれの生活を根本から変えたように、多くの中国人の生活様式を変化させつつある。このような意味において、民国期を通じてそうであったように、海の向こう側で起こりつつあるライフスタイルの多くの面での変化に、中国という国はつながり続けているのである¹⁹。

¹ この論文で述べた考えを形成していく際に助力してくれた方々、周明之、パークス・コウブル (Parks Coble)、ヴィルト・イデマ (Wilt Idema)、李鐘玄、馬小鶴に心からの謝意を表する。

「天下」の語は、政治的支配に関連付けられることが多いが、「物質世界」の意で使用される場合もある。政治的な意味での使用については、Ann Paludan, *Chronicle of the Chinese Emperors: The Reign-By-Reign Records of the Rulers of Imperial China* (London: Thames and Hudson, 1998), p. 8を参照のこと(邦訳は、アン・パールダン『中国皇帝歴代誌』(創元社、2000年))。本稿においては、より哲学的、文化的に広い意味で、そして「天の下に存在するすべてのもの」という本来の字義でこの語を使用した。また、「天下為公」という成句が歴史的に使われてきたように、哲学的な意味で「universal」を意味する場合もある。『中国倫理学百科全書』(長春、吉林人民出版社、1993年)の第2巻、93頁を参照のこと。

² 省と行政区の数は、民国期を通じて変動し続けた。政府活動と投票過程への参加を成人男性だけに限定するという考え方は、北半球に位置するすべての民主主義国家で一般的な考え方だった。今日、自らの民主主義システムを最も強く推奨している2つの国家は、1920年代になって初めて女性参政権を認めた(米国は1920年、英国は1928年)。中国でも、当時の風潮に同調した考えが明らかに存在していた。民国初期(1912年から1928年まで)における「議会制民主主義」についての概観で、英語で書かれた、最も示唆に富んだ研究としては、もはや古典となった次の作品を参照のこと。Andrew J. Nathan, *"Peking Politics, 1918-1923: Factionalism and the Failure of Constitutionalism"* (Berkeley: University of California Press, 1976)。

³ 軍閥の中には、常に思慮深い政治家に利用されていた者もいたという視点も心に留めておくべきであろう。エドワード・マッコード (Edward McCord), *The Power of the Gun: The Emergence of Modern Chinese Warlordism* (Berkeley: University of California Press, 1993), p. 310を参照のこと。マッコードによれば、民国期の潜在的な危機は、政治的権威が正統性の位置を見出すことにあったという(彼の結論を参照せよ)。暗示的な正統性をもった政治的権威の追及と実現可能な外交政策の確保というテーマは、川島真『中国近代外交の形成』(名古屋、名古屋大学出版会、2004年)において探求されている。

⁴ 汪精衛自身の観点からその動機を理解しようと、汪に同情的な説明を試みたのが、王克文の『汪精衛・国民党・南京政権』(台北、国史館、2001年)である。ここでは、国民党の最高指導者たちの陰謀に対して汪が極度に不信感を抱いていたことが説明されている。汪はいまだに一般的には漢奸とみなされているため、王克文はこの著作を公表した後、匿名での脅迫を受けている。汪精衛が直面していた全面的な状況を、説得力ある筆致で詳述するのは次の書である。Parks M. Coble, *"Facing Japan: Chinese Politics and Japanese Imperialism, 1931-1937"* (Cambridge, MA: Council East on Asian Studies, Harvard University, 1991)。

⁵ 中国における新聞と雑誌の導入と普及、そしてそれらの中で使用された表記法についてのきわめて有益な解説を、バーバラ・ミットラー (Barbara Mittler) がおこなっている。Barbara Mittler, *A Newspaper for China? Power, Identity, and Change in Shanghai's News Media, 1872-1912* (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2004)を参照せよ。また、張志強は民国期の出版に関してきわめて深い考察をおこなっている。張志強『面壁齋研書録』(南京、江蘇教育出版社、2001年)を参照のこと。

⁶ 胡適と彼の思想についてのきわめて深い考察を周明之がおこなっている。Min-Chih Chou, *Hu Shih and Intellectual Choice in Modern China* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 1984)を参照のこと。胡適がその晩年に、当時の中国が直面していた政治的混乱に幻滅し、また人生にも幻滅して打ちひしがれていたとする周の解釈は、賛成することができるものである。

⁷ 梅娘の作品は、満州国と北京において出版された。当時、両地域は日本の支配下にあった。梅娘の生涯を概観した著作として、ノーマン・スミスの作品を次に挙げる。Norman Smith, "Only Women can Change this World into Heaven' Mei Niang, Male Chauvinist Society, and the Japanese Cultural Agenda in North China, 1939-1941". (*Modern Asian Studies*, 40, 1 (2006), pp 81-107). スミスは、梅の小説の主人公である「魚」について次のように解説している。「芬 (Fen) は、彼女の息子の父親でもあるパートナーを拒絶し、いとこと関係をもつ妊婦だ。そしてパートナーといとこを捨てて、新たな愛を探すことに憧れている」。そして芬は、「私を抑圧し虐待する権利をもった」すべての男を受け入れるのを拒絶する (Ibid., pp 97-98.)。日本支配下における中国人の困難な生活について、山根幸夫は異なる側面を描き

出している。山根幸雄『建国大学の研究：日本帝国主義の一断面』（東京、汲古書院、2003年）を参照のこと。山根は、日本経営の学校における中国人と朝鮮人学生に対する組織的な差別について報告している。

⁸ 戦時中、日本支配下で活動した中国人作家について、幅広い視野から調査した作品として張泉の次の著作を挙げる。張泉『抗戦時期的華北文学』（貴陽、貴州教育出版社、2005年）。

⁹ 近年、纏足の習慣についての分析が研究者の間で深くなされてきている。研究史の初期に有力だった見方は、特に明清期においては、特権的男性エリートの好色的で性的な楽しみのためにつくられた習慣であるとするものであった。五四運動批判によって盛んになり、強く主張された見解は、纏足の習慣は、中国における男性優位社会によって女性に無慈悲にも課されたとみなすものであった。うまく歩行できないがために、家の奥の限られた物理的空間に閉じ込められたままでいることを女性に想像させるこのような見方では、纏足女性の男性社会への依存が強調されていた。フェミニズム的な見方は、いまだにこの解釈を支持している。しかしながら、1980年代後半から纏足の解釈をめぐる状況は複雑化の様相を見せ始めている。結局のところ、娘の足を縛るのは母親であった。そして、可能な限り足を小さくしたいと望んだのは、多くの場合は少女たち自身であった。研究者が、纏足女性の考えを代弁しようとした場合に、社会的圧力や反応の仕方に対して自らの判断を下すことができる個人として彼女たちを見た場合に、ただ単純に男性社会を非難して、実際にお互いの足を縛りあった女性のことを無視するのは不公平ではないだろうか。この問題に対して、高度な解釈をおこなったものとして、英文で著された Wang Ping (王屏) の研究を挙げる。Wang Ping, “*Aching for Beauty: Footbinding in China*” (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2000), pp 29-53 を参照のこと。纏足について、あるひとつの説を採用することの難しさを論じたのが、Dorothy Ko, *Cinderella’s Sisters: A Revisionist History of Footbinding* (Berkeley: University of California Press, 2005.) である（邦訳は、ドロシー・コウ『纏足の靴—小さな足の文化史』（平凡社、2005年））。

清朝期の纏足の習慣は、満州族による支配に反対の意志を示したものであるとする解釈も提起されている。満州族の中では女性が足を縛ることが認められることはなかった。また中国女性に対しても纏足を繰り返して禁じたことがこの説の根拠となっている。この解釈では、中国男性は、満州族の髪型を受け入れることによって屈服し、中国女性は「中国的な」纏足の習慣を続けていくことで満州族による命令に抵抗したと説明される。このような観点については、高洪興『纏足史』（上海、上海文芸出版社、1995年）、p. 24 を参照のこと。

¹⁰ 少女たちと同様に、青年たちも個人の自主性のために奮闘はしたが、儒教の影響の強い当時の社会における女性の地位は、男性よりも低いものだった。少女たちが自らの人生において完全ではないにせよ独立を試みようとしても、多くの障害に直面することになった。1840年以降、清末期の女性に課された極端な制約について包括的に論じたのはポール・ロップ (Paul Ropp) 等の編著、*Passionate Women: Female Suicide in Late Imperial China* (Leiden: Brill, 2001) である。

¹¹ 民国期に起きた激動する変化の様子を、地方における生活の面から捉えた報告として、Henrietta Harrison, *The Man Awakened from Dreams: One Man’s Life in a North China Village, 1857-1942* (Stanford: Stanford University Press, 2005) を挙げる。上海の洗練された、国際的な文化の観点から説明したものとしては、Leo Ou-fan Lee, *Shanghai Modern: The Flowering on a New Urban Culture in China, 1930-1945* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1999) がある。また、外国人の眼から民国期の中国人の生活の実態を描いたものとして、『大陸大旅行秘話：東亜同文書院学生』（東京、滬友会、1991年）を挙げる。日本が運営した上海の学校、東亜同文書院の学生は大抵が日本の少年たちであったが、中国全土に散らばって三ヶ月にわたる調査旅行をおこない、卒業論文として自らの経験についての報告を執筆した。自分たちが旅行する間に見聞したことについて、虚飾を交えることなく報告がなされている。

¹² 文盲の山賊リーダーとしての張作霖に対する伝統的な見方を正確に捉え直したのが、渋谷由里の『馬賊で見る「満洲」：張作霖のあゆんだ道』（東京、講談社、2004年）である。ここでは、当時の「正統的」紳士階級がそうしていたように、張が南満州の裕福な地主になったことが述べられている。張の初期の活動は、農地が荒らされないように見張りをし、農作物が安全に市場に運びこまれるとその対価として農民たちから保護料を徴収するというマフィアのようなものだった。呉佩孚とその人間性について解説したのは、文斐編『我所知道的呉佩孚』（北京、中国文史出版社、2004年）である。

¹³ 蒋介石の政治における保守的傾向と、それにもかかわらず西洋から入ってきた新しい考え方や価値観、習慣を受け入れることで社会を変えようとする願望については、ジョン・フィッツジェラルドの次の著作

で説明されている。John Fitzgerald, *Awakening China: Politics, Culture, and Class in the Nationalist Revolution* (Stanford: Stanford University Press, 1996). 蒋介石と呉佩孚は、風が吹き荒れる華北の平原を行進する、まったく飾りたてのない権力政治をおこなう、典型的な中国北部の軍閥だった。蒋介石は典型的な南部の軍閥であり、誰に対しても等しく冷酷だった。しかし、革命的で、反体制的なオーラをまとった最初の人物でもあった。

¹⁴ 民国期には、極端に政治状況が不安定であったにもかかわらず、驚異的な規模での経済の開発と拡大が起こっている。筆者の研究では、軍閥による近代化のための投資とインフラ建設の強調を試みている。ロナルド・スレスキー (Ronald Suleski)、*Civil Government in Warlord China: Tradition, Modernization, and Manchuria* (New York: Peter Lang, 2002) を参照のこと。新しい技術によって中国のあらゆる側面に変容が起こり、変容が中国全体に拡大したことに留意すべきであろう。表記法の拡大と大量の新雑誌や新聞の発行は、新しい印刷技術によって促進された。この点については明確に説明したのは次の著書である。Christopher A. Reed, *Gutenberg in Shanghai: Chinese Print Capitalism, 1876-1937* (Honolulu: University of Hawaii Press, 2004).

¹⁵ 白話文が受け入れられていく一方で、伝統的な文言文は、中華人民共和国が成立してから数十年間は無視されていた。その後、文言文を保護するために、正式なカリキュラムとして再び学校で教えられるようになる。文語文で書くことよりも、文語文を読みこなすことの方に重点が置かれている。問題は、すべての伝統文学が繁体字を使って執筆されていたのに対し、現在の教科書が簡略化された文字である簡体字を使って書かれていることである。

¹⁶ 毛沢東を最後の皇帝とみなす場合、毛の実生活のきわめて詳細な状況が彼の個人医によって明らかにされたことがきわめて重要である。Li Zhisui, *The Private Life of Chairman Mao: The Memoirs of Mao's Personal Physician* (New York: Random House, 1994) は、中国語版、日本語版 (李志綏『毛沢東の私生活』(東京、文藝春秋、1994年)) を含む各国語に翻訳されている。

¹⁷ 地方における選挙を概観する際は、Suzanne Ogden, *Inklings of Democracy in China* (Cambridge, MA: Harvard University Asia Center, 2002) を参照のこと。今日の中国における社会的かつ個人的感情の変化に関して、農村部の中国人に対して伝統的な考え方がどのような影響を与えているのかという問題を詳細に検討することで魅力的な見解を示している著作が、秦暉『伝統十論：本土社会的制度 文化及其変革』(上海、復旦大学出版社、2003年)である。

¹⁸ 中国における新たな現象のひとつに、地方政府の活動に対する大規模かつ組織的な農民運動がある。このような場合は、地方政府がその土地で生活する農民に保障措置を講ずることなく、土地を没収していたなどの例が考えられる。このような抗議活動においては、西洋で見られるものと同様に、民衆に対する教育を含むあらゆる手段が使われている。農民たちは、抗議活動を指導するために外部から訪れた経験豊富な弁護士によって組織されている場合もある。抗議する農民たちは、現行憲法や地方の法令で保証されている権利を厳格に追及し、地方政府による妨害を阻止しようとする。抗議運動をおこなう者たちはメディアに警鐘を促し、メディアは彼らの活動を報道する。他のコミュニティーにも行動を促し、下級政府の問題を解決する能力をもつ上級の政府組織の注目を浴びるように振舞う。このような「理想的」シナリオは、破綻することも多い。地方政府が抗議運動をおこなう者たちを叩きのめすために黒社会の人間を雇ったり、上級政府がただ単に地方警察に事態を收拾するよう命じる場合もあるからである。こうした「考え」のシナリオは、地方政府が抗議する者を打ちのめすために悪党を雇ったり、上級の政府が地方警察の手荒い活動を単純に是認したりする際に、突如として現れる。こうした問題についての啓発的で刺激的な報告に、于建嶸『岳村政治 転型期中国郷村結合的変遷』(北京、商務印書館、2001年)がある。

¹⁹ 新しいコミュニケーション技術によって中国社会がどのように変わっていくのかという問題に対して、多くの中国人研究者や評論家が予測を試みている。グローバリズムとインターネットがマルクス主義や鄧小平 (1904-1997) 理論とどのように結びつくのか、これはいかなる学者にとっても説明困難な問題であるが、これを試みたのが、鮑宗豪『全球化与当代社会』(北京、上海三聯書店、2001年)である。

(邦訳 山岸健太郎・野口武)